

事例3 秋田県立A高等学校の事例

ここでは進学校である秋田県立A高等学校におけるキャリア教育（Will Project）の立ち上げの実際についてPDCAの順に記す。特にキャリア教育の評価について、その開発の経緯や評価結果の活用方法、その後の課題について取り上げる。

1. 生徒のニーズ・課題を把握する

プロジェクト着手当時の校長は、生徒をただ大学に入学させればよいというのではなく、しっかりした目標を持って大学に進み有為な人材として活躍できるように育てる責任があると考えていた。この考え方に基づいて学校では平成18年の夏から「将来構想検討委員会」を立ち上げ、9ヶ月をかけてこれまでの活動の大幅な見直しを行った。委員会では全教職員による議論、生徒への聞き取り、さらには保護者へのアンケート調査などを実施し、学校が抱える現状の課題と今後の方針について話し合った。

話し合いの結果、生徒の現状については、明確な目的意識をもって進学を志す生徒が以前に比べ少なくなってきたこと、自発的な学習習慣が身に付いていない生徒が増加してきたように思われることなどがあげられた。また、教職員からの声として、偏差値重視の指導や課題を与えるだけの指導では、生徒の学習意欲を喚起、維持することは難しく、飛躍的に生徒を伸ばすことには限界があると感じるようになってきていることが明らかになった。

2. 学校理念とキャリア教育の目標の接続

キャリア教育を学校で進めていく時の難点の1つとして、キャリア教育の方針と学校の理念との統合がある。A校では、新たに導入されるキャリア教育の考え方をこれまでの学校方針と統合し、基本方針を再定義した。こ

の基本方針は、「目指す学校像と人間像」「目指す生徒像」「指導の柱」の3つの分野に分けて示された（表4-9）。

表4-9 考え方と基本方針

1. 「Will Project」の基本的考え方
◎「人を育てる」ことを明確に意識した、人づくりのシステム化を目指す。 ・生徒・職員のモチベーションを高める取組であること。 ・学校を変える起爆剤となるものであること。
2. 基本方針
(1) 目指す学校像と人間像 ○学校像：夢と志をはぐくむ学校 ○人間像：様々な分野で日本や地域の中核を担う、心身ともに健康な人間 ※地域の進学校としての立場を堅持し、生徒の能力や特性を最大限伸ばし、生徒が自らの夢の実現に向かって歩んでいくための土台をつくる。
(2) 目指す生徒像 ①礼儀を含め、基本的な生活習慣が確立している生徒 ②自己の可能性に挑戦する気概を持った生徒 a 確かな学力を身につけた生徒 b 主体的に学び活動する生徒 c 明確な将来目標と達成意欲を持った生徒 ③心と体を鍛え、健康で心豊かな生徒
(3) 指導の柱 I. 基本的な生活習慣を確立する。 II. 己を知り、他を知り、社会を知ることで、学びの意欲を高める。 III. 学習指導の改善 IV. 文武両道の堅持

出典：A高等学校「高等学校におけるキャリア教育のあり方に関する調査研究 平成19年度実施報告書」（1年次）より抜粋

3. 目標設定と評価

測定可能な目標を作成することは困難を極めた。各活動と目標とのつながりはわかりにくく、測定することが可能な目標にはなっていなかった。この課題を解消するために、学年修了時点における望ましい生徒の状態を整理することにした。基本方針（表4-9）に基づき、学習領域・進路領域・自己／社会性／生活領域と3領域に分けた望ましい生徒の状態をあげていった（表4-10）。

次にこれらの項目をカード状にし、カード

が配置されたテーブルを囲む形で、推進チームの教員たちで目標や、学年ごとの基準を話し合い、身に付けるプロセスに沿ってカードの並べ替えを行った。あえてカードの状態にしたのは、キャリア教育に関与する教員間で共通言語と目標を持つためである。並べ替えを行うにあたっては、最初に高校3年間で目指したい姿をあげ、そのゴールにたどり着くまでのプロセスを学年ごとに並べ替えた。カードに記載がないものの必要だと考えられる項目についてはカードを追加し、必要ないと判断したものは削除した。最終的に「必要なし」と判断した項目については、学校の活動を通じた支援は難しいものの、卒業後または家庭内の教育で身に付けることを推奨する項目として分類した。

さらに、これらを学校内部の視点だけでおこなうと偏りが生じるため、学校外部からの視点として2名のアドバイザーによる過不足の指摘をおこなった。最終的に120の項目が選択され、項目数は多いものの、これらの項目による調査を毎年2月に実施することが決定した。

4. 評価結果の検証と活動への反映

「生徒に主体性を持たせたいのにそうはなっていないのではないか」——調査結果からは生徒らが自身で選択し、決定することに自信が持てていない様子がうかがえた。さらに教員による話し合いの結果からは、推進委員会と学年部や担任間で時間的な余裕がないため、活動の主旨や進め方が十分に伝わらないことがあるということ、せっかく多くの社会人講演会が開催されているのだから、話を聞いた後に生徒が議論したり考えたりする内省を促す時間も必要だといった意見があがった。これらの調査結果を受け、平成20年度以降の改善策として以下が校長から提示され、教員間で共有された。

「自己決定感」を養う取組を考えてもらいたい。
→現在計画されている総合的な学習の時間や特別活動を中核とした取組にとどまらず、学習指導や部活動における指導を含め、すべての取組の中に「内発的学習意欲を支える三要素（自己効力感・自己決定感・他者受容感）」を導入し、取組の見直しと改善を図る。

この改善の方向性が出された後、授業改善の取組（授業の中で生徒の学習意欲を喚起する、主体的に考えさせる）や、生徒たちの内省を促す時間の設置についての検討が進められた。

表4-10 目標設定カードの項目（抜粋）

学習	進路	自己・社会性・生活
生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります
書く力・読む力・聴く力・伝える力を伸ばす方法を知っている	自分の興味のある仕事に就くために準備すべきことを知っている	正しい決断にたがって行動し、間違った決断は修正することができる
学習	進路	自己・社会性・生活
生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります
勉強の仕方や効率のよい勉強時間の使い方を知っている	自分の興味や能力を理解し、それらが自分の仕事や大学の選択にどのように役立つかを理解している	自分の決断を評価し判断できる
学習	進路	自己・社会性・生活
生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります
一生涯に立つ学習の習慣や学習スキルを獲得できた	基本的な力（数学、読書など）がやりたい仕事とどのように関連しているか知っている	自分で決断できる
学習	進路	自己・社会性・生活
生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります
ノートの取り方を改善できる	卒業後の計画を立てることができる（雇用機会、大学、職業訓練、奨学金など）	奨学金やその他の財政面での援助に関する情報を入手できる
学習	進路	自己・社会性・生活
生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります
自分でやり始めた課題をもっと決山こなすことができる	自分の興味のある特定分野の中で様々な職業を探索できる	生活必需品にかかる費用を把握している
学習	進路	自己・社会性・生活
生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります
欲求不満を感じても、自分の勉強または仕事の成果まで粘り強く続けることができる	自分の将来の選択肢について情報を集め、それとつながる仕事の世界を理解している	就職までの学費、その他の費用について見通しを立てることができる
学習	進路	自己・社会性・生活
生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります
いくつかの、興味を引かれる学問的分野を持っている	将来の仕事において役に立つと思われる、免許・資格取得の計画を立てることができる	自分がどのような職業に一番の興味、適性、能力を持っているか知っている
学習	進路	自己・社会性・生活
生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります	生徒は以下のことを実行できる自信があります
受験スキルを向上させる方法を知っている	いくつかの、興味を引かれる職業を持っている	他者を受容することができる。また、自分も他者に受容してもらうことができる

出典：辰巳哲子、2008、「キャリア教育の体系化プロセス—進学校における初年度の取り組み—」『Works Review』vol.3